

大学生が恋人とセックス（性行為）をする理由と セックス（性行為）満足度・関係満足度との関連

高坂 康雅¹・澤村いのり²

The Relationships between Reasons for Having Sexual Intercourse with their Intimate Partner;
Satisfaction with Sexual Intercourse and Satisfaction with their Relationship among University Students

Yasumasa KOSAKA¹ and Inori SAWAMURA²

The present study investigated relationships between reasons for having sexual intercourse with an intimate partner; satisfaction with sexual intercourse and satisfaction with their relationship among university students. The participants were 141 university students who have intimate partners and have sexual intercourse with their partner. They were asked to respond to 45 questions relating to reasons for having sexual intercourse with their partner. In addition, there were a question relating to satisfaction with sexual intercourse; and further a question relating to satisfaction with their relationship. A results of factor analysis identified six factors; sexual desire, confirmation of their love, demand of their partner, pressure from society to have sexual intercourse, a method of control, and seizing an opportunity. Structural equation modeling showed that confirmation of their love increased their satisfaction with sexual intercourse, which in turn raised their satisfaction with their relationship. In contrast, in the case of males, pressure to have sexual intercourse lowered their satisfaction with sexual intercourse, and consequently their satisfaction with their relationship went down.

Key words: Sexual intercourse, Satisfaction with relationship, Romantic relationship, University Students

問題と目的

本研究の目的は、大学生が恋人とセックス（性行為）をする理由を明らかにし、セックス（性行為）満足度や関係満足度との関連を検討することである。

2次性徴によって青年期に入ると、青年は異性に興味・関心をもつようになり、そのなかで異性と恋愛関係をもち、その異性（恋人）とセックス（性行為）をするようになる。忠津・高見・梶原（2009）は、大学生の男女ともに60%以上がセックス（性行為）を経験していることを明らかにしている。また、日本性教育協会（2007）の調査では、大学生のセックス（性行為）経験率は1974年では男子で23.1%、女子で11.0%であったが、

¹ 和光大学（Wako University）

² 無所属（Independence）

1999年以降は男女ともに60%程度を維持していることが示されている。つまり男女ともに、大学生の半数以上がセックス（性行為）を経験しているのが現状である。

和田（1999）は、これまでもセックス（性行為）経験と心理的要因および個人的背景要因との関連をみた研究は多いが、セックス（性行為）をすると決める際に影響を及ぼす要因に焦点をあてた研究はほとんどないと指摘している。そのなかで、Christopher & Cate（1984）は、セックス（性行為）をする動機として、「ポジティブ感情・愛情」、「義務・圧力」、「生理的覚醒・受容性」、「状況」の4因子を抽出しており、和田（1999）は、ある異性と初めてのセックス（性交）時に重視する要因として、「愛情」、「生理的覚醒」、「状況・圧力」の3因子を抽出している。さらに、斎藤・中野・芝木・笹嶋（2006）は、大学生547名を対象に、セックス（性行為）する理由について自由記述形式を用いた調査を行ったところ、「愛情を確かめたい」が50.1%（274名）最も回答が多く、次いで「その場の雰囲気」（16.1%（88名））であった。また、「相手が望む」（6.0%（33名））、「快楽を得たい」（4.9%（27名））などの回答もあげられている。Hendrick & Hendrick（1992 齊藤監訳 1998）はセックスをする目的として、緊張やフラストレーションを和らげること、相手を支配すること、孤独や退屈を克服すること、相手を喜ばすこと、相手に夢中になること、第三者に対して復讐すること、愛を証明し、愛情を示すことなどを列挙している。

また、男女差について、Christopher & Cate（1984）は、男子は「義務・圧力」を重視し、女子は「ポジティブ感情・愛情」を重視していることを明らかにし、和田（1999）は、男子は「生理的覚醒」を重視し、女子は「愛情」を重視することを明らかにしている。日本性教育協会（2007）では、初めて性交した時の動機やきっかけとして、男女ともに「好きだったから」という回答が多く、また、男子では「好奇心から」や「セックス（性行為）を経験してみたかった」という回答

が多くみられている。斎藤ら（2006）では、「愛情を確かめたい」は、男子（44.2%（95名））よりも女子（53.4%（159名））の方が回答が多く、「その場の雰囲気」は、男子（18.1%（39名））の方が女子（15.8%（47名））よりも回答が多く、また、「相手が望む」は、男子（5.1%（11名））よりも女子（7.4%（22名））の方が回答が多く、「快感を得たい」は、男子（7.0%（15名））の方が女子（3.4%（10名））よりも回答が多かったことが示されている。

これらの結果から、セックス（性行為）をする理由には、愛情や興味・好奇心、義務・圧力、生理的覚醒など、多様なものがあり、また、男女ともにセックス（性行為）をする理由として、愛情を重視しているが、男子は興味・好奇心や義務感から、女子は相手からの要望などから、セックス（性行為）をしていることも推察される。しかし、これらの先行研究では、セックス（性行為）をする理由を、恋愛関係あるいはセックス（性行為）関係にある2者関係内で捉えようとしているが、それらの関係の外にいる第3者が青年のセックス（性行為）に影響を及ぼしていることも明らかされている。例えば、片瀬（2001）は、中学生から大学生を対象とした調査を行い、友人関係を楽しいと評価している者ほど性行動経験率が高いことを示し、また、Benda & DiBlasio（1993）はセックス（性行為）に対する友人からの同調圧力がセックス（性行為）経験と関連していることを明らかにしている。一方、小林・佐藤（1986）では、高校生女子において、友人関係に不満を抱いている者の方がセックス（性行為）経験が多く、和田・西田（1992）は、友人関係がうまくいっているかどうかと性態度・性交度との関連性はないことを示している。このように、恋愛関係・セックス（性行為）関係の外にいる友人からの影響については、一貫した結果が得られているとはいえないが、青年のセックス（性行為）をする理由に関わっている可能性は否定できず、本研究においても改めて検討すべき点であると考えられる。

また、これまでのセックス（性行為）の動機・

理由に関する先行研究では、セックス（性行為）をする相手を恋人のような特定の対象としておらず、また、“（ある異性と）初めてセックス（性行為）をする時”のように、ある一時点での理由・動機を尋ねている。しかし、大学生のセックス（性行為）の相手のほとんどが恋人であり、またセックス（性行為）も恋愛関係において、一度だけのものではなく、継続的な行為である。松井（2006）は、1980年代後半の大学生を対象とした調査と2000年の大学生を対象とした調査において、恋愛行動の進展に関する比較を行い、以前は婚約や結婚と同じ第5段階にあったセックスが、2000年の調査では、「恋人として友人に紹介する」などと同じ第4段階に早まっていることを示している。また、高坂（2014）は恋人のいる大学生の約70%は、交際8ヶ月以内にセックス（性行為）をしていることを明らかにしており、セックス（性行為）は、恋愛の過程で体験すべき通過儀礼のひとつとなっているとも指摘されている（石川、2007）。これらが示すように、かつてはセックス（性行為）は結婚と強く結びつけられていたが、現在では恋愛と結びついたものとなっている。しかし、恋愛関係で行われるセックス（性行為）については、避妊や性感染症などの性教育やデートDV研究において否定的な行為として検討されているだけであり、恋愛関係におけるセックス（性行為）の意義については十分に検討されているとは言い難く、これらの点から考えても、大学生の恋愛関係におけるセックス（性行為）の意義を明らかにするためには、恋人との継続的なセックス（性行為）の理由について検討する必要があると考えられる。

どのような理由で恋人とセックス（性行為）をするかは、セックス（性行為）そのものに対する評価（セックス（性行為）満足度）だけではなく、恋人との関係に対する評価（関係満足度）にも関わると考えられる。牧野（2008）は、性行動に対する男女の認知の違いは、互いの恋愛感情や、その後の恋愛関係に大きな影響を与えることを示唆している。セックス（性行為）をする理由は、性

行動に対する認知のひとつであると考えられる。また、北村（2011）は、男性（恋人）からの求めに対して、「それに応えるのが義務」と捉えてセックス（性行為）をしたものの、セックス（性行為）に不満を抱いている女性の例を挙げている（pp.114-116）。このように、セックス（性行為）をする理由がセックス（性行為）満足度や関係満足度に関連していることが推測される。実際、海外の夫婦関係に関する研究では、性生活に不満があるほど、夫婦関係そのものに対する不満が生じることが明らかにされている（Kisler & Christopher, 2007 など）。また、Yeh, Lorenz, Wickrama, Conger, & Elder（2006）は、アメリカの夫婦283組を対象に縦断調査を実施し、夫婦の性的満足度（sexual satisfaction）が高くなると、夫婦関係満足度が高まることを明らかにしている。しかも、この研究では、夫婦関係満足度が高いことが性的満足度を高めるのではなく、性的満足度が高いことが夫婦関係満足度を高めるという因果の方向性が明確に示されている。しかし、これまで、恋愛関係において、それらの関連を検討した研究は見当たらない。日本性教育協会（2007）では、初めての性交に対する評価の理由として、「相手と深い関係になった」、「愛情を感じた」のような、愛情表現やコミュニケーションとしてのセックス（性行為）に対する評価が男女ともに高い傾向があることが明らかにされている。これに対し「気持ちよかった」という回答は、男子は18歳以下で42.2%、19歳以上で38.5%が選択しているが、女子は18歳以下で15.9%、19歳で13.0%となっており、身体的快感に基づく評価は、男女ともに決して高くはなく、しかも、男女で明確な差がみられている。このようなセックス（性行為）に対する評価（セックス（性行為）満足度）の背景にはセックス（性行為）をする理由があり、また、セックス（性行為）満足度は恋人との関係に対する評価（関係満足度）にも関わってくると考えられる。

大学生になると、中学生や高校生に比べ、ひとり暮らしの増加やアルバイトなどによる経済的な

余裕から、恋人とセックス（性行為）をしやすい生活環境が整うようになり、実際、大学生の半数はセックス（性行為）を経験している。青年の性行為については、性感染症や望まない妊娠などの問題と関わらせて論じられることが多いが、大学生自身は恋人と生殖（子どもをつくる）ためではなく、コミュニケーションや愛情表現を目的としてセックス（性行為）を行い、その結果、関係が親密になったと感じている。つまり、大学生は恋人とのセックス（性行為）を恋愛関係において肯定的に意味づけて行っており、Yel et al. (2006) がアメリカの夫婦関係で示したように、性的満足度（本研究におけるセックス（性行為）満足度）を高めることが、恋愛関係そのものの関係満足度を高めるのであれば、大学生が恋人とセックス（性行為）をすることは、安易に問題視したり批判したりする行為であるとは言い難いことを示すことができると考えられる。

そこで本研究は、①大学生が恋人とセックス（性行為）をする理由を明らかにする、②セックス（性行為）をする理由の性差や交際期間との関連を明らかにする、③セックス（性行為）満足度を媒介として、セックス（性行為）をする理由と関係満足度との関連を明らかにする、という3点を目的とする。

予備調査

目的

予備調査では、青年（中学生から大学生）が恋人とセックス（性行為）をする理由に関する記述を収集することを目的とする。

方法

分析対象者 東京都内の大学生75名（男子31名、女子44名；平均年齢：20.4歳、標準偏差：1.3歳）を分析対象者とした。この内、セックス（性行為）の経験がある者が40名（男子18名、女子22名）、セックス（性行為）の経験がない者が35名（男子13名、女子22名）であった。

調査時期 2011年7月に実施した。

調査内容 まず学年と年齢と性別を尋ねたのちの、(1)と(2)についての回答を求めた。

(1) セックス（性行為）の経験の有無 「あなたはセックス（性行為）をしたことがありますか。」という教示のもと、1.「はい」、2.「いいえ」の2件法で回答を求めた。

(2) セックス（性行為）をする動機・理由 「あなたは、青年（中学生～大学生）がセックス（性行為）をする動機・理由にはどのようなことがあると思いますか」という教示に対して、5つの回答欄を用意し、自由に書くよう求めた。

実施手続き 調査は講義時間の一部を用いて集団で実施した。対象者が回答時に抵抗感や嫌悪感を抱かないよう、回答前に、セックス（性行為）に関わるアンケートであることを伝えた。また、調査は無記名であり、誰がどのように回答したかは把握できないことや、回答は任意であり、回答しなくても不利益は生じないこと、回答をもって調査への協力に同意したとみなさせていただくこと、などを口頭および紙面で伝えた。集団内で回答することに抵抗感を抱く対象者がいることが考えられたため、その場で回答せず、翌週に提出してもかまわないことを口頭で説明した。質問紙をする際に回答内容が他者にみられることを防ぐため、テープ付きの封筒に入れて配布し、封をしたうえで提出してもらった。その場で提出された場合は、その場で封をしてもらったうえで、回収した。

結果

セックス（性行為）の理由のカテゴリー分類 青年が恋人とセックス（性行為）をする理由について、201個の記述が得られた。得られた記述について、著者を除く心理学を専攻する大学生4名が、記述内容の類似性をもとに、分類を行った。その結果、j.「その他」を除き9カテゴリーに分類された（Table 1）。

a.「愛情確認」は、「相手のことが好きだから」などの記述52個で、相手との関係をよりよいもの

Table 1 青年がセックス（性行為）をする理由に関する自由記述の分類結果

記述の分類	セックス（性行為）経験あり		セックス（性行為）経験なし		合計	記述例
	男子	女子	男子	女子		
a. 愛情確認	12 (25.0)	22 (26.0)	6 (19.0)	12 (33.0)	52 (26.0)	相手のことが好きだから
b. 自己の欲求	20 (42.0)	13 (15.0)	8 (26.0)	5 (14.0)	46 (23.0)	性欲をおさえられないから
c. 興味・好奇心	5 (10.0)	10 (12.0)	6 (19.0)	4 (11.0)	25 (12.0)	セックスに興味があるから
d. 周囲からの影響	2 (4.0)	9 (10.0)	2 (6.0)	7 (19.0)	20 (10.0)	セックスをしていないと恥ずかしいから
e. 相手からの要望	1 (2.0)	11 (13.0)	2 (6.0)	0 (0.0)	14 (7.0)	相手にセックスを求められるから
f. 流れ・雰囲気	1 (2.0)	6 (7.0)	5 (16.0)	1 (3.0)	13 (6.0)	お互いのタイミングが合ったから
g. 安心感の獲得	2 (4.0)	8 (9.0)	0 (0.0)	1 (3.0)	11 (5.0)	セックスをしないと不安だから
h. 恋愛の一環	1 (2.0)	4 (5.0)	0 (0.0)	2 (5.0)	7 (3.0)	恋愛をすればセックスをするのだと思っているから
i. 支配・独占	1 (2.0)	2 (2.0)	0 (0.0)	3 (8.0)	6 (3.0)	相手を独り占めしたいから
j. その他	3 (6.0)	1 (1.0)	2 (6.0)	1 (3.0)	7 (3.0)	子どもが欲しいから
合計	48 (100.0)	86 (100.0)	31 (100.0)	36 (100.0)	201 (100.0)	

にしようとしたり、相手の愛情を確認するためにセックス（性行為）をするというような理由であった。b.「自己の欲求」は、「セックス（性行為）は気持ちがいいから」などの記述46個で、自己の欲求を満たそうするためにセックス（性行為）をするというような理由であった。c.「興味・好奇心」は、「セックス（性行為）に興味があるから」などの記述25個で、セックス（性行為）に対する、興味や好奇心のためにセックス（性行為）をするというような理由であった。d.「周囲からの影響」は、「セックス（性行為）をしていないと恥ずかしいから」などの記述20個で、友だちや同世代による影響によってセックス（性行為）をするという理由であった。e.「相手からの要望」は、「相手にセックス（性行為）を求められたから」などの記述14個で、相手の要求に応じてセックス（性行為）をするというような理由であった。f.「流れ・雰囲気」は、「自然な流れから」などの記述13個で、その場の流れや雰囲気によってセックス（性行為）をするという理由であった。g.「安心感の獲得」は、「さみしいから」などの記述11個で、安心感を得るためにセックス（性行為）をするという理由であった。h.「恋愛の一環」は、「恋愛の1つとしての行為だから」などの記述7個で、恋愛行動の一環としてにセックス（性行為）をするという理由であった。i.「支配・独占」は、「相手を支配するため」などの記述6個で、相手を支配したり、独占をしたい気持ちを満たそうとする

ためにセックス（性行為）をする理由であった。

本調査

目的

本調査では、大学生が恋人とセックス（性行為）をする理由を明らかにし、セックス（性行為）をする理由の性差や交際期間との関連を明らかにし、セックス（性行為）満足度を媒介として、セックス（性行為）をする理由と関係満足度との関連を明らかにする。

方法

分析対象者 現在恋人がおり、その恋人とセックス（性行為）をしている大学生141名（男子56名、女子85名；平均年齢：20.2歳、標準偏差1.2歳；平均交際期間15.4ヶ月、標準偏差15.8ヶ月）を分析対象者とした。

調査時期 2012年5月～2013年1月に実施した。

調査内容 対象者にまず、学年と年齢と性別の回答を求め、その後（1）から（6）についての回答を求めた。

（1）現在の恋人の有無 現在の恋人の有無を尋ねるために、「あなたには恋人がいますか。」という教示のもと、1「現在、恋人がいる」、2「現在、恋人がいない」の2件法で回答を求めた。なお、2「現在、恋人がいない」と回答をした回答者には、ここで回答を終了してもらい、分析対象から

は除外した。

(2) 恋人との交際期間 恋人との交際期間を尋ねるために、「恋人との交際期間はどのくらいですか。」という教示のもと、交際期間を記述してもらった。

(3) 恋人との関係満足度 恋人との関係満足度を尋ねるために、「あなたは恋人との関係に、どのくらい満足していますか。」という教示のもと、1「全然満足していない」から10「非常に満足している」の10件法で回答を求めた。

(4) 恋人とのセックス（性行為）の有無 現在の恋人とのセックス（性行為）の有無を尋ねるために、「あなたは恋人とセックス（性行為）をしたことがありますか。」という教示のもと、1「はい」、2「いいえ」の2件法で回答を求めた。なお、2「いいえ」と回答した回答者には、回答を終了してもらい、分析対象からは除外した。

(5) 恋人とのセックス（性行為）満足度 恋人とのセックス（性行為）満足度を尋ねるために、「あなたは恋人とのセックス（性行為）に、どのくらい満足していますか。」という教示のもと、1「全然満足していない」から10「非常に満足している」の10件法で回答を求めた。

(6) セックス（性行為）をする理由 回答者が恋人とセックス（性行為）をする理由を尋ねるために、研究1で得られたj.「その他」を除く9カテゴリーについてそれぞれ5項目ずつ、合計45項目を作成した。「あなたがセックス（性行為）をする理由はなんですか。」という教示のもと、1「当てはまらない」から5「当てはまる」の5件法で回答を求めた。

実施手続き 調査は講義時間の一部を用いて集団で実施した。対象者が回答時に抵抗感や嫌悪感を抱かないよう、回答前に、セックス（性行為）に関わるアンケートであることを伝えた。また、調査は無記名であり、誰がどのように回答したかは把握できないことや、回答は任意であり、回答しなくても不利益は生じないこと、回答をもって調査への協力に同意したとみなさせていただくこと、などを口頭および紙面で伝えた。また集団内

で回答することに抵抗感を抱く対象者がいることが考えられたため、その場で回答せず、翌週に提出してもかまわないことを口頭で説明した。質問紙をする際に回答内容が他者にみられることを防ぐため、テープ付きの封筒に入れて配布し、封をしたうえで提出してもらった。その場で提出された場合は、その場で封をしてもらったうえで、回収した。

結果

セックス（性行為）をする理由項目の因子分析
セックス（性行為）をする理由に関する45項目について、重みづけのない最小2乗法による因子分析を行ったところ、固有値1.0以上で6因子が抽出された。そこで、因子数を6から減らしながら、重みづけのない最小2乗法・promax回転による因子分析を行ったところ、6因子解が最適であると判断された（Table 2）。6因子で説明できる分散の総和の割合は51.8%であった。

第1因子には、29b「セックス（性行為）が好きだから」（因子負荷量 .93）、30c「相手の身体に興味があるから」（.84）など、b.「自己の欲求」やc.「興味・好奇心」の項目が高い負荷量を示しており、セックス（性行為）に対して興味や好奇心を持ち、自分の欲求を表す因子であると解釈できるため、「自己の欲求」と命名した。

第2因子には、10a「お互いの気持ちを感じ合えるから」（.82）、16g「セックス（性行為）をすることで、心が満たされるから」（.69）など、a.「愛情確認」やg.「安心感の獲得」の項目が高い負荷量を示しており、自分や相手の愛情を確認し、安心するためにセックス（性行為）をすることを意味する因子であると解釈できるため、「愛情の確認」と命名した。

第3因子には、23e「相手にセックス（性行為）をしようと誘われるから」（.87）、14e「相手がセックス（性行為）をしたがるから」（.84）など、すべてe.「相手からの要望」の項目で構成されていた。相手が求めるためセックス（性行為）をしていることを意味する因子であると解釈できるた

Table 2 セックス（性行為）をする理由項目の因子パターン

項目内容	欲求	愛情	要望	周囲	支配	雰囲気	平均値	SD
第1因子「自己の欲求」								
29b：セックスが好きだから	.93	.00	.06	-.13	-.07	-.05	3.29	1.30
30c：相手の身体に興味があるから	.84	-.08	.09	.15	.02	-.15	2.71	1.40
11b：性的快感を味わいたいから	.83	.11	-.05	-.10	-.01	-.04	3.41	1.31
20b：性的欲求を満たしたいから	.79	-.05	-.09	-.11	.03	.12	3.18	1.40
2b：セックスは気持ちいいから	.69	.17	-.08	-.14	-.01	.04	3.98	1.07
39c：色々なセックスのパターンを試してみたいから	.67	.02	.21	.16	.01	-.12	2.30	1.31
38b：性的欲求をおさえられないから	.65	-.18	-.20	-.05	.16	.19	2.36	1.28
21c：相手の身体を見たり触ったりしたいから	.62	.05	.00	.21	-.01	-.06	2.74	1.41
24f：なんとなくセックスしたい気分になるから	.59	.01	-.13	-.08	-.14	.30	3.38	1.20
3c：セックスに興味があるから	.58	.13	.05	.22	-.19	.01	3.59	1.18
12c：セックス中にしか見られない、相手の姿を見たいから	.31	.30	.08	-.03	.19	-.11	3.16	1.42
第2因子「愛情の確認」								
10a：お互いの気持ちを感じ合えるから	.01	.82	.03	-.02	.02	-.19	3.79	1.17
16g：セックスをすることで、心が満たされるから	.25	.69	-.03	-.08	.10	-.03	3.24	1.26
19a：セックスをすることで相手との愛が深まるから	.10	.63	.14	-.03	-.05	.02	3.75	1.05
1a：相手のことが好きだから	-.24	.61	-.02	-.01	-.17	-.04	4.76	0.57
43g：セックスをすることで、自分は愛されていると実感できるから	.03	.59	-.07	.07	.28	.06	3.35	1.27
37a：相手との関係をより良いものにしたいから	-.05	.56	.14	.20	.06	.08	3.54	1.20
34g：セックスをすることで安心感を得られるから	.02	.52	-.01	-.04	.34	.20	3.03	1.25
40d：周りよりもたくさんの経験をしたいから	.26	-.46	.13	.29	.21	.20	1.39	0.77
15f：お互いがセックスをしたいと思うタイミングが一緒だから	.13	.43	.07	-.09	-.03	.31	3.10	1.23
8h：セックスは、恋愛に必要な行為の1つだと思うから	.14	.39	-.03	.21	.02	.09	3.66	1.21
第3因子「相手からの要望」								
23e：相手にセックスをしようと誘われるから	.12	.10	.87	.02	-.16	-.19	2.90	1.24
14e：相手がセックスをしたがるから	-.01	.06	.84	.02	-.11	.05	3.23	1.25
41e：相手がセックスを望んでいるから	-.01	.03	.77	.03	-.03	.21	3.25	1.21
5e：相手からセックスを求められるから	-.25	.12	.75	-.06	.03	.13	3.55	1.24
32e：相手がセックスをすると喜ぶから	-.02	-.12	.65	-.02	.31	.12	3.28	1.17
第4因子「周囲からの圧力」								
26h：恋愛関係を維持するためには、セックスをしなければならないと思っているから	-.12	-.01	-.01	.71	.04	.09	2.20	1.20
35h：恋愛をする上でセックスは避けられないから	-.04	.22	-.05	.62	-.22	.31	2.77	1.23
22d：周りの友だちは、みんなセックスをしているから	-.02	.06	-.05	.59	.10	-.18	1.54	0.87
4d：セックスをしていないと恥ずかしいから	-.05	.02	-.02	.58	-.03	-.11	1.56	0.85
13d：友だちとのセックスに関する会話が出来るから	.15	-.02	.06	.48	.02	-.09	1.57	0.86
44h：恋愛をすればセックスするものだと思っているから	.14	.13	-.11	.48	-.09	.37	2.71	1.28
31d：「セックスをしている」ということを友だちに自慢したいから	.17	-.28	.09	.42	.28	-.05	1.37	0.74
第5因子「支配・独占」								
45i：セックスをすることで、相手を自分の思い通りにできるから	-.02	-.17	-.01	.03	.82	.06	1.80	0.98
9i：セックスをすることで、相手を自分のものにできたと思うから	.04	.11	-.07	.05	.63	-.02	2.71	1.31
7g：セックスをすることで、さみしい気分がまぎれるから	-.04	.06	.09	-.21	.55	.22	2.36	1.23
36i：セックスをすることで相手を独り占めできると思うから	-.11	.27	-.13	.21	.53	-.03	2.44	1.34
18i：セックスをすることで、相手を支配することができると思うから	.02	.16	-.01	.14	.52	-.18	1.83	1.11
27i：セックスをしないと、相手を他の異性にとられるかもしれないと思うから	-.23	-.04	.09	.35	.45	-.09	2.07	1.27
17h：セックスをしてはじめて、恋愛関係になったと思うから	-.08	.00	-.09	.32	.38	.07	1.73	1.01
28a：セックスをすることで、相手とコミュニケーションをとることができるから	.20	.33	.03	-.07	.37	-.08	3.28	1.22
25g：セックスをしないと不安だから	.05	.13	-.03	.14	.29	-.06	2.01	1.03
第6因子「雰囲気」								
42f：セックスをするような雰囲気になるから	.03	.11	.17	-.22	.06	.69	3.50	1.15
33f：その時のノリでセックスが始まってしまうから	.10	-.28	.09	.03	.01	.69	2.68	1.29
6f：自然な流れでセックスが始まるから	-.08	.17	.00	.00	-.01	.65	3.67	1.18
因子間相関								
自己の欲求	—	.37	-.09	.40	.53	.36		
愛情確認		—	.10	.18	.39	.38		
相手からの要望			—	.03	.01	.35		
周囲からの圧力				—	.51	.15		
支配・独占					—	.25		
雰囲気						—		
各因子へ負荷量が.40以上の項目の α 係数								
	.92	.85	.90	.76	.79	.76		

注1) 項目番号の後ろのアルファベットは予備調査で得られた分類を表している：a. 愛情確認, b. 自己の欲求, c. 興味・好奇心, d. 周囲からの影響, e. 相手からの要望, f. 流れ・雰囲気, g. 安心感の獲得, h. 恋愛の一環, i. 独占・支配

注2) 各因子に対し、.40以上の負荷量を太枠で囲った

め、「相手からの要望」と命名した。

第4因子には、26h「恋愛関係を維持するためには、セックス（性行為）をしなければならないと思っているから」(.71), 22d「周りの友だちは、みんなセックス（性行為）をしているから」(.59) など、h.「恋愛の一環」やd.「周囲からの影響」の項目が高い負荷量を示しており、周りへの見せつけやセックス（性行為）をすることへの圧力によりセックス（性行為）していることを表す因子であると解釈できるため、「周囲からの圧力」と命名した。

第5因子には、45i「セックス（性行為）をすることで、相手を自分の思い通りにできるから」(.82), 9i「セックス（性行為）をすることで、相手を自分のものにできたと思うから」(.63) など、i.「支配・独占」の項目が高い負荷量を示しており、相手を支配し独占したいと思ってセックス（性行為）をしていることを表す因子であると解釈できるため、「支配・独占」と命名した。

第6因子には、42f「セックス（性行為）をする雰囲気になるから」(.69), 33f「その時のノリでセックス（性行為）が始まってしまうから」(.69) など、f.「流れ・雰囲気」の項目が高い負荷量を示しており、その場の流れや雰囲気でセックス（性行為）をしていることを表す因子であると解釈できるため、「雰囲気」と命名した。

各因子に .40以上の負荷量を示した項目について、 α 係数を算出したところ、第1因子「自己の欲求」の α 係数は .92, 第2因子「愛情確認」は .85, 第3因子「相手からの要望」は .90, 第4因子「周囲からの圧力」は .76, 第5因子「支配・独占」は .79, 第6因子「雰囲気」は .76であり、いずれの因子も十分な内的一貫性が確認された。

そこで、各因子に .40以上の負荷量を示した項目の平均を算出し、各得点とした。

セックス（性行為）をする理由と性・交際期間との関連 セックス（性行為）をする理由が、性別や交際期間によって異なるかを検討するために、まず、恋人との交際期間を各群が同程度の人数になるように、交際期間1～6ヶ月の者（33人；

23.9%）を短期間群、7～15ヶ月の者（51人；37.0%）を中期間群、16ヶ月以上の者（54人；39.1%）を長期間群という3群に分けた。

次に「セックス（性行為）をする理由」6得点およびセックス（性行為）満足度、関係満足度に対し、交際期間（3）×性（2）の2要因分散分析を行った（Table 3）。その結果、セックス（性行為）満足度については交互作用が有意であった（ $F_{(2, 124)} = 5.99, p < .01$ ）。単純主効果の検定（Bonferroni法）を行ったところ、短期間群では男子よりも女子の方が、長期間群では女子よりも男子の方がセックス（性行為）満足度が高いことが明らかになった。また、「周囲からの圧力」得点（ $F_{(1, 138)} = 9.12, p < .01$ ）、「相手からの要望」得点（ $F_{(1, 138)} = 8.25, p < .01$ ）、関係満足度（ $F_{(1, 124)} = 5.91, p < .05$ ）において、性の主効果が有意であった。「自己の欲求」得点と「周囲からの圧力」得点では男子の方が、「相手からの要望」得点と関係満足度では女子の方が、得点が高かった。

セックス（性行為）をする理由がセックス（性行為）満足度、関係満足度に及ぼす影響 まず、「セックス（性行為）をする理由」6得点、セックス（性行為）満足度、関係満足度、交際期間との相関を男女別に算出した（Table 4）。その結果、男子ではセックス（性行為）をする理由のうち「愛情の確認」得点（ $r = .34, p < .05$ ）のみがセックス（性行為）満足度と関連していたが、女子では「自己の欲求」得点（ $r = .37, p < .01$ ）、「愛情の確認」得点（ $r = .39, p < .001$ ）、「相手からの要望」得点（ $r = -.29, p < .05$ ）が有意な相関を示していた。また、セックス（性行為）をする理由と関係満足度との関連については、女子の「雰囲気」（ $r = -.25, p < .05$ ）のみが有意な負の相関を示し、男子では有意な相関を示す得点はみられなかった。さらに、セックス（性行為）満足度と関係満足度については、女子（ $r = .24, p < .05$ ）よりも男子（ $r = .42, p < .01$ ）の方が関連が強かった。

次に、セックス（性行為）をする理由が関係満足度・セックス（性行為）満足度に及ぼす影響を検討するために、「セックス（性行為）をする理由」

Table 3 セックス（性行為）をする理由 6 得点およびセックス（性行為）満足度、関係満足度に対する交際期間（3）×性（2）の 2 要因分散分析結果

	短期間群 (35名)	中期間群 (52名)	長期間群 (54名)		F 値	
得点	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	交際期間	性	交互作用
自己の欲求						
男子	4.01 (0.81)	3.43 (0.81)	3.37 (0.83)	2.16	24.82***	0.90
女子	2.88 (0.87)	2.83 (0.90)	2.70 (1.03)		女<男	
愛情の確認						
男子	3.42 (0.68)	3.43 (0.84)	3.31 (0.54)	1.05	0.20	0.34
女子	3.53 (0.68)	3.30 (0.77)	3.16 (0.89)			
相手からの要望						
男子	2.66 (1.38)	2.93 (1.18)	3.04 (0.91)	1.32	8.25**	0.06
女子	3.17 (0.63)	3.52 (0.92)	3.49 (1.08)		男<女	
周囲からの圧力						
男子	2.16 (0.68)	2.41 (0.90)	1.95 (0.60)	0.80	9.12**	2.77†
女子	1.79 (0.46)	1.78 (0.61)	1.92 (0.60)		女<男	
支配・独占						
男子	2.32 (0.76)	2.63 (0.94)	2.13 (0.82)	0.38	1.55	1.96
女子	2.18 (0.75)	2.06 (0.91)	2.26 (0.90)			
雰囲気						
男子	3.62 (1.14)	2.90 (1.05)	3.28 (0.89)	1.50	0.05	0.94
女子	3.37 (0.97)	3.27 (1.05)	3.28 (0.99)			
セックス（性行為）満足度						
男子	6.38 (2.36)	6.73 (2.12)	7.72 (1.99)	0.01	1.28	5.99**
女子	7.89 (1.41)	7.61 (1.50)	6.52 (2.15)		短：男子<女子，長：女子<男子	
関係満足度						
男子	6.54 (2.37)	7.53 (1.68)	8.08 (2.02)	1.04	5.91*	2.72†
女子	8.53 (1.39)	7.97 (1.87)	8.15 (1.77)		男子<女子	

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$ **Table 4** セックス（性行為）をする理由 6 得点、セックス（性行為）満足度、関係満足度の男女別相関

	愛情	要望	圧力	支配	雰囲気	セックス 満足度	関係 満足度	交際期間 (ヶ月)
自己の欲求	.48***/.61***	.10/.02	.53***/.25*	.50***/.34**	.32* / .39**	.00 / .35**	-.01/.00	-.16/- .11
愛情の確認		.48***/- .01	.32*/.43***	.50***/.60***	.50***/.31**	.34*/.42***	.16/.04	-.06/- .20†
相手からの要望			.11/.15	.00/.13	.56***/.33**	.24† / -.17	-.07/- .19†	.05/.01
周囲からの圧力				.51***/.54***	.16/.20†	-.20/.10	.00/.11	-.24† / -.02
支配・独占					.09/.21†	-.03/.12	.04/.01	.03/- .03
雰囲気						.15/.10	-.18/- .19†	-.04/- .02
セックス（性行為）満足度							.42**/.30**	.13/- .15
関係満足度								.11/.05

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

注) スラッシュ (/) より前が男子 (53名), 後ろが女子 (77名) の値である

6 得点がセックス（性行為）満足度に影響を与え、また「セックス（性行為）をする理由」6 得点とセックス（性行為）満足度が関係満足度に影響を及ぼすモデルを作成し、共分散構造分析を行った。この際、セックス（性行為）満足度において

交際期間と性の交互作用が確認されたため、交際期間を統制変数として投入した。また、男女による比較検討を行うため、多母集団分析を行った。男女いずれにおいても有意にならなかったパス・共変動を削除しながら繰り返し分析を行い、すべ

てのパス・共変動が少なくとも男女いずれかにおいて有意になったところで分析を終え、そのモデルを採用した。採用したモデルに対する適合度指数は、GFI=.951, AGF=.890, CFI=1.000, RMSEA=.000であり、データはモデルに十分に適合していると判断された (Figure 1)。

男子は、セックス (性行為) 満足度に対して「愛情の確認」得点が正の影響を、「周囲からの圧力」得点が負の影響を及ぼし、セックス (性行為) 満足度から関係満足度に正の影響がみられた。また、「雰囲気」得点は関係満足度に有意傾向ではあるが、負の影響を示した。

女子は、セックス (性行為) 満足度に対して、「愛情の確認」得点が正の影響を示し、セックス (性行為) 満足度は関係満足度に正の影響を示した。また、「雰囲気」得点は関係満足度に負の影響を示した。

なお、男女ともに、交際期間からセックス (性行為) 満足度および関係満足度に有意な影響はみられなかった。また、男女においてパス係数の値に有意な差はみられなかった。

考 察

本研究の目的は、大学生がセックス (性行為) をする理由を明らかにし、セックス (性行為) 満足度や関係満足度との関連を検討することであった。

大学生が恋人とセックス (性行為) をする理由
大学生が恋人とセックス (性行為) をする理由を分析したところ、「自己の欲求」、「愛情の確認」、「相手からの要望」、「周囲からの圧力」、「支配・独占」、「雰囲気」の6種類に分類された。本研究における「自己の欲求」は「生理的覚醒」(和田, 1999) や「快楽を得たい」(斎藤ら, 2006) と対応しており、「愛情の確認」は「愛情」(Christopher & Cate, 1984; 和田, 1999) や「愛情を確かめたい」(斎藤ら, 2006) と、「相手からの要望」は「受容性」(Christopher & Cate, 1984) や「相手が望む」(斎藤ら, 2006) と、「雰囲気」は「状況」(Christopher & Cate, 1984) や「その場の雰囲気」(斎藤ら, 2006) と、それぞれ対応していると考えられる。また、「周囲からの圧力」と「支配・独占」は、Christopher & Cate (1984, 1985) の「義務・圧力」や和田 (1999) の「状況・圧力」が混在した因子

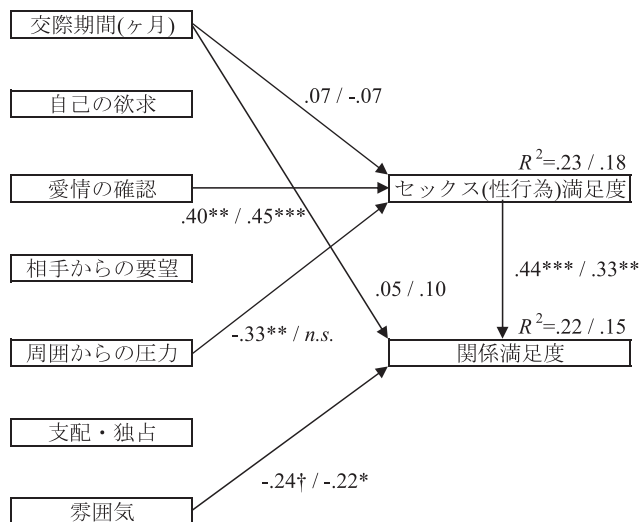


Figure 1. セックス (性行為) をする理由がセックス (性行為) 満足度および関係満足度に及ぼす影響 (左: 男子 / 右: 女子)

となっているが、これらよりも、友人関係という恋愛関係・セックス（性行為）関係外の他者（友人）の影響が明確に示された因子となっていると考えられる。

Christopher & Cate (1984) や和田 (1999)、斎藤ら (2006) の対象者は、調査時点でセックス（性行為）をしている恋人がいる者だけでなく、なかにはセックス（性行為）未経験者も含まれていた。本研究の対象者はすべて、調査時点で恋人がおり、その恋人とセックス（性行為）をしている者であったため、Christopher & Cate (1984) や和田 (1999)、斎藤ら (2006) よりも適切な因子構造が得られたと考えられる。

セックス（性行為）をする理由の性差と交際期間
大学生が恋人とセックス（性行為）をする理由の性差を検討したところ、男子は「自己の欲求」、「周囲からの圧力」に高い得点を示し、女子は「相手からの要望」に高い得点を示した。つまり、男子は、自分の性的な興味や欲求を満たすためにセックス（性行為）をする反面、周りの友人などにセックス（性行為）をしていることを当然視されたり、見せつけたいという欲求も持ち合わせていると推察される。一方女子は、恋人からの求めに応じてセックス（性行為）をする人が多いと考えられる。これは、Christopher & Cate (1985) において、男子よりも女子の方が「関係性」を重視することが明らかにされているように、相手との関係性を壊さないようにするために、相手からの要求に応じていると考えられる。Hendrick & Hendrick (1977 齊藤監訳 1998) では、性的役割について、セックス（性行為）を2人のうちで最初に求めるのは男子の方であり、それに歯止めをかけるのが女子の役割であることが明らかにされている。また、和田 (1994) でも、男性は性に対して寛容な考えをもち、道具的であるのに対し、女性は保守的であることを指摘している。さらに、柏尾 (2006) は、「男性にとっては性的な有能さは誇りとなるものであるのに対し、女性にとっては、それは沈黙を守るべきもの」であるという性役割期待が、青年の性行動に影響を及ぼし

ていることを指摘している。

このように、男性は、自身の性的欲求を素直に示すことが性役割的にも承認されており、またそうすることを周囲からも期待されているのに対し、女性はそのような性的欲求は示さずに、相手（男性）からの求めに応じることが期待されていると考えられ、このような周囲の性役割期待が、男女におけるセックス（性行為）をする理由の差異にも表れたと推察される。

なお、交際期間については、有意な効果はみられなかった。つまり、交際期間によってセックス（性行為）をする理由は変化しないということが考えられる。高坂・小塩 (2015) は、青年期の恋愛関係の様相を把握するための尺度（恋愛様相尺度）を作成し、交際期間との関連を検討しているが、3下位尺度得点のいずれとも交際期間は有意な関連を示さないことが明らかにされている。ここから、交際期間が長くなればなるほど、関係が親密になるとはいえない。もしセックス（性行為）をする理由が、恋愛関係の関係性や親密さに影響を受けるのであれば、交際期間ではなく、関係性や親密さに関わる変数との関連を検討する必要があると考えられる。

セックス（性行為）をする理由とセックス（性行為）満足度・関係満足度との関連
セックス（性行為）をする理由がセックス（性行為）満足度・関係満足度に及ぼす影響を検討し、男女による比較検討を行ったところ、男女ともに、セックス（性行為）満足度に対して「愛情の確認」得点が正の影響を及ぼし、セックス（性行為）満足度が関係満足度に正の影響を及ぼしていた。つまり、愛情を確認するためや相手との関係をより深めるために行うセックス（性行為）は、セックス（性行為）の満足度を高め、さらには関係そのものの満足度も高めることが示された。

男性では、「周囲からの圧力」得点がセックス（性行為）満足度に負の影響を及ぼしていた。先述したように、男性は自身の性的欲求を示し、セックス（性行為）を女性に求めるものであるという性役割期待が存在すると考えられるが、一方

で、現在の青年は「男女平等」という価値観を教育されてきた世代である。そのため、特に男性では「男女平等社会」と「男女不平等恋愛」というジレンマが生じており（牛窪, 2015）、男性が性役割期待に沿ってセックス（性行為）を主導することにプレッシャーや矛盾を感じていると推測される。このようなプレッシャーや矛盾を抱えて行うセックス（性行為）は行為への不満足を高め、結果として関係そのものに対しても不満を抱くことになると考えられるのである。

このように、男子では、性役割期待に基づいた理由でセックス（性行為）を行うことは、セックス（性行為）満足度や関係満足度を下げることにつながるが、愛情を確認したり深めたりするための主体的・積極的なセックス（性行為）は恋愛関係において肯定的に機能することは、男女ともにいえることであることが示された。

なお、「雰囲気」でセックス（性行為）をすると、セックス（性行為）満足度を媒介せず、直接的に、関係満足度を低下させることが明らかになった。「なんとなく」や「流れで」という理由が曖昧で、作業のように行われるようなセックス（性行為）では、恋人との関係性に対するコミットメントが実感できないため、関係満足度が低下すると考えられる。

また、「自己の欲求」、「相手からの要望」、「支配・独占」は、セックス（性行為）満足度に対しても、関係満足度に対しても、男女ともに有意なパスは見られなかった。「自己の欲求」や「支配・独占」は項目内容からも、セックス（性行為）に対して、自己焦点化された理由であると考えられる。また、「相手からの要望」も、そこには、セックス（性行為）をすることを断ることによって相手から嫌われたくないという思いが推測され、その点で自己焦点化された理由であるといえる。このような自己焦点化された理由でのセックス（性行為）は、その場での快感や安心感をもたらすかもしれないが、セックス満足度や関係満足度には直接的に関わるものではないと推察される。

今後の課題と展望 本研究では、大学生が恋人と

のセックス（性行為）をする理由を明らかにし、セックス（性行為）満足度や関係満足度との関連について検討をした。その結果、大学生が恋人とセックス（性行為）をする理由は6因子に分類され、男子は「自己の欲求」得点と「周囲からの圧力」得点が、女子は「相手からの要望」得点が高かった。また、男女ともに「愛情の確認」のためにセックス（性行為）をすると、セックス（性行為）満足度が上昇するとともに関係満足度も高まることが明らかとなった。さらに、恋人と1対1の関係性において成り立つはずのセックス（性行為）をする理由には、友人などの周りの影響を受けることが明らかとなり、その背景には伝統的な性役割期待が存在することも示唆された。

今後の課題として、本研究では、大学生がセックス（性行為）をする理由について自由記述を収集し、その記述を分類し、項目を作成した。因子分析の結果抽出された因子は、先行研究で見られている意味内容も含まれており、その点で、大学生がセックス（性行為）をする理由を包括的に捉えることができていと考えられる。しかし、明確な目的のもとで行うような行動とは言い難いセックス（性行為）については、自由記述では拾いきれない理由も存在し得ると考えられる。今後は、面接調査などより内省を促進するような手法を用いたり、さらなる理論的な検討を行ったりするなどして、本研究で見出されたセックス（性行為）をする理由の適切さについて確認する必要があると考えられる。

また、大学生を対象に行ったが、セックス（性行為）をする理由は年齢とともに変化していくことが考えられる。そのため、セックス（性行為）をする理由の発達の変化を明らかにするために、年齢による違いを比較する必要があるだろう。

さらに、恋人同士のセックス（性行為）であっても、セックス（性行為）満足度や関係満足度を高める理由だけでなく、低める理由も存在することが、本研究で明らかとなった。そのため、恋人同士のセックス（性行為）に対する理由の相違によって、恋愛関係の崩壊につながる可能性も考え

られる。そこで、男女それぞれのセックス（性行為）に対する考え方や感じ方の差異・ズレが恋愛関係の継続にどのような影響を及ぼすかについて、ペア・データを用いて検討する必要があるだろう。

最後に、本研究では、男子において、セックス（性行為）満足度や関係満足度を低減させるセックス（性行為）をする理由には、伝統的な性役割期待が関わっていることが示唆された。新田・村上・大石・清水（2007）では、女性では男女平等志向的な態度と性交の意思決定には関連はみられなかったが、男性では男女平等志向が高いほど、性交の意思決定の際に相手の意思を確認する傾向が強いことを示している。ここからも、今後は男女における性役割期待や青年自身がもつ性役割観とセックス（性行為）をする理由との関連を検討することが求められる。

引用文献

- Benda, B. B., & DiBlasio, F. A. (1993). An integration of theory: adolescent sexual contacts. *Journal of Youth and Adolescence*, 23, 403-420.
- Christopher, F. S., & Cate, R. M. (1984). Factors involved in premarital sexual decision-making. *Journal of Sex Research*, 20, 363-376.
- Christopher, F. S., & Cate, R. M. (1985). Anticipated influence on sexual decision-making for first intercourse. *Family Relations*, 34, 265-270.
- Hendrick, S., & Hendrick, C. (1977). Liking, loving, and relating: First edition. California: Brooks/Cole Publisher.
- （ヘンドリック, S. & ヘンドリック, C. 齊藤勇（監訳）（1998）. 恋愛・性・結婚の人間関係学 川島書店）
- 石川由香里（2007）. 情報源の違いがもたらす性意識のジェンダー差——＜純粋な恋愛＞志向をめぐる—— 日本性教育協会（編）「若者の性」白書——第6回 青少年の性行動全国調査報告——（pp.81-100）小学館
- 柏尾眞津子（2006）. 性行動 白井利明（編）よくわかる青年心理学（pp.52-53）ミネルヴァ書房
- 片瀬一男（2001）. 性行動の低年齢化がもつ意味 日本性教育協会（編）「若者の性」白書——第5回 青少年の性行動全国調査報告——（pp.23-46）小学館
- Kisler, T. S., & Christopher, F. S. (2008). Sexual exchanges and relationship satisfaction: Testing the role of sexual satisfaction as mediator and gender moderator. *Journal of Social and Personal Relationship*, 25, 587-602.
- 北村邦夫（2011）. セックス嫌いな若者たち メディアファクトリー
- 小林かよ子・佐藤芳昭（1986）. 高校生の性経験とその背景について 思春期学, 4, 62-67.
- 高坂康雅（2014）. 大学生の恋愛行動の進展 和光大学現代人間学部紀要, 7, 215-228.
- 高坂康雅・小塩真司（2015）. 恋愛様相尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 発達心理学研究, 26, 225-236.
- 牧野幸志（2008）. 青年期における恋愛と性行動に関する研究（1）——デート状況と性行動の正当化認知との関係—— 経営情報研究, 16(2), 1-10.
- 松井 豊（2006）. 恋愛の進展段階と時代的变化 齊藤 勇（編）イラストレート恋愛心理学（pp.62-70）誠信書房
- 日本性教育協会（編）（2007）. 「若者の性」白書——第6回 青少年の性行動全国調査報告—— 小学館
- 新田真弓・村上明美・大石時子・清水清美（2007）. 大学生の性交や否認行動の決定と性役割態度の関係（第1報）. ——性別による比較を通して—— 思春期学, 25, 315-320.
- 斎藤和佳子・中野朋美・芝木美沙子・笹嶋由美（2006）. 大学生の性意識と性行動の実態調査 北海道教育大学紀要 教科科学編, 56, 47-61.
- 忠津佐和代・高見千恵・梶原京子（2009）. 大学

生の性・セックスのイメージ：青年期ピアカウンセリング講座の効果指標として 思春期学, 27, 259-269.

牛窪 恵 (2015). 恋愛しない若者たち ディスカヴァー・トゥエンティワン

和田 実 (1994). 大学生の性に対する態度：性行動と恋愛について 東京学芸大学紀要第1部門 (教育科学), 45, 155-156.

和田 実 (1999). 大学生が性交する際に重視する要因——性差と経験種別からの検討 東京学芸大学紀要第1部門 (教育科学), 50, 111-119.

和田 実・西田智男 (1992). 性に対する態度および性行動の規定因 社会心理学研究, 7, 54-68.

Yeh, W.J., Lorenz, F. O., Wickrama, K. A. S., Conger, R. D., & Elder, G. H. Jr. (2006). Relationships among sexual satisfaction, marital quality, and marital instability at midlife. *Journal of Family Psychology*, 20, 339-343.

付 記

本論文の予備調査は、第2著者（澤村）が2011年度和光大学現代人間学部卒業論文として提出した論文の一部であり、本調査は第2著者（澤村）が2013年度和光大学大学院社会文化総合研究科修士論文として提出した論文の一部を、それぞれ第1著者（高坂）が加筆修正およびひとつの論文としてまとめたものである。また、本調査は、日本青年心理学会第21回大会において発表されている。

謝 辞

本調査の実施にあたり、宇井美代子先生（玉川大学）、岡田 努先生（金沢大学）、小塩真司先生（早稲田大学）、佐藤有耕先生（筑波大学）、森永康子先生（広島大学）、若尾良徳先生（浜松学院大学）にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。また、調査に協力・回答してくださった皆さまにも、厚く御礼申し上げます。

（2016年2月24日受稿，2017年3月9日受理）